
魔法は使いたいけど管理局には入りたくありません。

をきた

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法は使いたいけど管理局には入りたくありません。

【Nコード】

N9467Z

【作者名】

をきた

【あらすじ】

魔法少女リリカルなのはの世界観を借りた外伝物です。原作キャラは出ないので、それでもいいという人だけ見てください。それが嫌な人は見ずに帰ってください。

第一話「始まり。イケメンなお兄さんが転生させてくれた。」（前書き）

新連載。

第一話「始まり。イケメンなお兄さんが転生させてくれた。」

「はじめまして。貴方が私のマスターですか？」

「いえ違います。」

「え？」

「え？」

これがインテリジェントデバイス「アイ」との出会いだった。

そこから魔法というものが存在する世界に巻き込まれる日々の始まりだった…

俺は前まで…というよりも前世は16歳だったが通り魔に刺されその短い人生を終えたはずだった。

ただ神様と名乗るイケメンなお兄さんが「すまん！！お前は通り魔に刺されて死ぬ運命じゃなかったんだ。本当は別の人間が刺されて死ぬはずだったんだが俺の部下がその別の人間に好きになってしまい、そいつの運命を弄ってそいつを生かしてしまった。だから運命を弄ったから別の人間が死ぬという運命が書きかわりお前が死ぬという運命に書きかわったんだ。」ということがあり、転生をすることになった。

ただそこは人気の二次創作「魔法少女リリカルなのは」の世界であり別の転生者がいる可能性があり、それに殺されないために能力を貰えるということで俺は魔眼を貰った。

貰うときに「魔眼かぁ。直死か？それとも複写眼か？殲滅眼か？」

直死？複写眼？殲滅眼？分らない…

俺はオリジナルの魔眼を作れるか聞いてみた。

「俺は神の中では一番上だからそんなもん簡単だ！！」

二つほど能力を伝えたら…

「お前：正気か：転生して力が貰えるんだぜ：何でそんな能力を！
！」

驚かれた挙げ句怒鳴られた。

俺が頼んだのは…相手の視界を乗っ取り目に見えるものを好きなように誤認させる力。二つ目はまだ秘密で

「まあ、いいか。お前送ったら楽しそうだな。」

そう言ってイケメンなお兄さんは俺の頭に手を置き力をくれた。

そして

そのまま頭を掴み俺を上に向かって投げた

は？普通足元に穴が開いてそこから落ちて転生なのに何で投げてんだあいつ！？

「ここは生と死の狭間なんだよ。下が死だ。上が生だ。下に落とすとせっかく転生させた魂が死ぬから上に投げたんだ。」

それを聞いた瞬間目の前が白くなり意識が途絶えた。そうして俺は転生した。

ただ俺が意識が途絶えそうな瞬間、イケメンなお兄さんが

「汝の新たな生に幸あれ」

と言った。

イケメンなお兄さんは悲しい顔をしながらそう言ったのが何故か見えて頭に焼き付いた。

そうして俺こと祭谷 雁斗という名を持ってこの世界に新たな生命として転生した。

のが約九年前だ。今は9歳の小学三年生です。

俺の両親は共働きであり家にいない。一人っ子だ。だから家には余り俺もいない。

最近は何くを探索するのが趣味になってきている。

小学校は私立聖祥大附属小学校だ。

主人公が通う小学校だったな。

イケメンなお兄さんが夢で原作のアニメを延々とながし続けてるか
ら覚えたわ！！てかイケお兄さんなにやってるんですか？

はあ。今日は神社の方に行ってくるわ。

このあとに出会うデバイスに巻き込まれ原作とは違う別のロストロ

ギアが巻き起こした戦いに巻き込まれることをその時の俺は知るよしもなかった。

続く!!

**第二話「デバイスとの出会いそして戦いへ。ていうかデバイスとの出会いを描いた
投稿です。」**

第二話「デバイスとの出会いそして戦いへ。ていうかデバイスとの出会いを描い

神社

はあく着いた。やっぱり小学生の体だときついわ。神社の階段

さて、早速辺りを探索しますか…

神社の近くの森

森の中はゴミだらけだった!!

とりあえず、ゴミ拾いをしながら探索をした。

ゴミ袋はお坊さんに言って貰いました。

「リーダースター」

ん？何か聞こえる。どっからだ。

「マスター、マスター」

どうやら俺の足元から聞こえるようだ。

足元にあるものと言えば、ただのチェーンだぞ。子供が鍵をなくさないようにベルトを着けるようなところにつけるな。

ん？何でチェーン？しかもチェーンの先に宝石がついてるな

「貴方は私のマスターですか？」

「違います。」

「え？」

「え？」

なに言ってるんだこいつ。こんなのに関わると大変なことになるから……さっさと退散。

「その人！！早くこの場から逃げてください！！！」

変なことをまた言い始めたぞ。

「なにぼやっとしてるんですか！！早くこの場から逃げてください！！！！あ！！？」

宝石がそう言った瞬間、俺の左腕が切り裂かれた。

「は？——ぐあああ！！！」

一瞬何が何だか分からず体が認識しなかったが……血を見て体が認識した。

・・・・・・・・・・

左腕が切り裂かれ痛い

と

何だ！？何だいきなり。

痛い痛い痛い痛い

何かに切り裂かれた？

痛い痛い痛い痛い痛い

刃物？ いや、鋭い爪？

痛い痛い痛い痛い痛い

痛みを我慢し冷静に分析をしようとするが…やはり人間は一度知った痛みを忘れることが出来ない。

冷静に分析との間に左腕が切り裂かれた痛みを考えてしまう。

ザシュ

誰かが森の雑草を踏む音だ。自分の前から聞こえたということは…

だんだん自分の左腕を切り裂いた人物が出てくる。

その人物の姿が見えていくたび切り裂かれた痛みとまた切り裂かれるかもしれない恐怖が雁斗を支配していく。

そして出てきたのはー

「グルルル！！」

「狼？」

銀色の狼。ただ目が赤く染まりそして黒いオーラを纏っている。それにでかい。

あれはーやばい！！

俺は…死ぬのかな？

「その人！！私を持ってください。」

諦めかけたその時あのチェーンの声が俺の耳に響いた。

「早く！！私をー」

仕方ない！！お前に賭けるから俺を絶体絶命の窮地から救ってくれ！！

俺は狼の隙についてチェーンの場所に走り、そいつを手にとった。

狼は、俺との距離を一瞬で詰めて俺の左腕を切り裂いた爪を俺に振りかぶった。

「プロテクション！！」

その声がまた響いた。その声と共鳴するかのように俺の前に水色の薄い壁が出来て、狼の爪を防いだ。

「マスター認証システム発動。貴方の名前は」

「祭谷 雁斗」

「マスター認証。インテリジェントデバイス「アイ」のマスターを祭谷 雁斗と承認。」

マスター？インテリジェントデバイス？

さっきからなに言ってるんだこのアイとか言うデバイス？は。

「マスター！！バリアジャケットを」

「は！？急にバリアジャケットって言われても分かるか！！」

「グルルル…」

狼さん：俺の準備が出来るのを待っていてるんですね。

「とにかく！！マスターの防護服のようなものです。頭にそれらしいものを思い浮かべてください！！」

「分かった。」

そういうことは早くいってこないと：

防護服かぁ、何がいいかなって狼さんが怒り始めてるゝ

早くしないと！！

よし大体こんなもんだろう。

「思い浮かべたなら私が直接脳から読み取りバリアジャケットを作ります。」

怖っ！！デバイス怖っ！！

俺の回りに光が出てきて、その光が俺に集まってきた。

俺はビクリして目を閉じた…そろそろ良いかな？

目を開けると…全身真っ黒。真っ黒のジャケットに真っ黒のズボンに靴。うん、最高だなこれ！！

「キヤアアアアアア」

アイには悲鳴をあげられた。何故悲鳴をあげる。かつこいいじやないか。

それにお前は俺の脳を読み取ってバリアジャケットを作ったのに何で悲鳴をあげる。それに嫌ならバリアジャケットを作る前に言えば良かったじゃん。

「何なんですか！？そのいかにも悪役です！！みたいなバリアジャケットは！？」

「そこはあとにしよう。狼さんもう限界らしいし…」

「グラアアア！！」

狼さんは雄叫びをあげ、

・・・・・・・・・・・・・・・・

俺達がいる方向とは逆方向に走った

「へ？」

アイは驚いてるな。まあ、今はあることを聞かなくちゃな。

「アイ！！武器はないのか！？」

「は？あ、あります！！今から出します！！」
そして武器が出てきた。

淡い水色の刀身をした西洋刀だ。
黒と似合わねえ

「よいいくぞ！！……後サポート任せたアイ！！」

「分かりました！！」

「グルルル…グラアアア！！」

いきなり狼さんが俺に飛びかかってきた。
狼さんはご乱心のようなだ。だが

「プロテクション！！」

ビキッ

狼の噛みつきを薄い障壁で防ぐが障壁にヒビが入った。

「アイ！！拘束とか出来ないの！？」

剣を刺そうにもああ、速かったら刺さる気がしない。

「一応、出来ます。使用しますか？」

「するに決まってるだろう！！」

「グラァァァ!!」

狼がここぞといわんばかりに襲いかかってきた。

「今だ!! アイ!!」

「マスター!! 魔力をお借りします!! チェーンバインド!!」

アイがそういったら、俺の足元に丸い魔方陣みたいなのが出てきて、狼の下にも魔方陣が出てそこから一本の鎖が狼を拘束した。

「グカツ!？」

「……………ッ!!」

グシュ!!

俺は鎖で拘束された狼の顔に剣を刺した。

その時手には狼を刺した感触が伝わってきて気持ち悪くなった。

「グ、グギャァァァ!!」

狼は断末魔のような雄叫びをあげ、消えた。

「……………ん? 何か落ちてる。」

気持ち悪い気分をごまかそうと狼がいた場所に落ちている物を見に行った。

落ちていたのは? 漆黒の銀狼という文字がはいったちよつとでかい

金貨だった。

狼は消えたというよりも金貨になったが正しいかな。

とりあえずまずは…

「アイ」

「何ですか？マスター」

「治癒とか出来る？」

「は？」

さっきから左腕の血が止まらないんだよねこれが…はっはっはっは
っはっはっはっ…痛い！！

魔法は使いたけれど管理局には入りたくありません。人物設定1（前書き）

雁斗とイケメンなお兄さんです。

魔法は使いたいけど管理局には入りたくありません。人物設定1

名前 祭谷 雁斗

性別 男

年齢 9歳（転生前16）

愛称 雁斗 祭 かりちゃん

容姿 黒髪黒眼。髪は肩にかかる程度。目はつり目でもタレ目でもありません。フツ目です。体型は普通：てか小学生がボディビルダーみたいな筋肉してるわけじゃないじゃん。

性格 厄介事には巻き込まれたくないタイプ。ただ巻き込まれたら厄介事から逃げる事を諦め全力でやる事をやる。愛称のかりちゃんは母親から呼ばれる名前。

名前 ???

性別 男?

年齢 ???

愛称 イケメンなお兄さん イケお兄さん 神

容姿 銀髪を腰まで伸ばしている。目はつり目。目の色は翡翠

性格 さっぱりした性格。自分の部下がしたことだが転生させた雁斗を心配したり、原作知識のない雁斗に原作アニメを見せるなど心配性な一面も。運命を弄った部下は嚴重注意と一ヶ月牢屋に閉じ込めただけ。死刑などにはしてない。甘いものが大好物。時折雁斗がいる世界に行き翠屋でケーキを買っていることがある。

最近は何故か釣りが趣味になったらしい。前に暇潰しに行った世界で青い髪をしたアロハを着た槍兵に釣りを教えてもらい、そのあと赤く口うるさい弓兵と仲良くなり釣り道具をもらい、色んな世界で釣りをしている。

第三話 「状況把握そして家族団らん。まあ、把握しても状況は全く変わらない」

最後のストックがあああ!!

第三話「状況把握そして家族団らん。まあ、把握しても状況は全く変わらない」

ふう〜 良かった良かった。血が止まって…
まあ、まだ痛いんですけどね。

「さて、アイ。早速聞きたいことがあるんだがいいか？」

「黙秘します…とは言えませんがね。」

頭良いな。インテリジェントデバイスって。

「俺が使ったのは魔法…で良いんだよね？」

「ええ。マスターが使用したのは間違いなく魔法です。」

魔法についてはイケメンなお兄さんが毎晩毎晩原作アニメを見さされたから知ってる。デバイスやバリアジャケットその他については夢の中なのであまり覚えていません。あ！！今うつすらと思い出してきた。

「じゃこの金貨は？」

「……………」

黙りますか…まあ、動物が金貨になるなんてことはまずありえない。
だからこれの正体は…

「これはロストロギアか？」

「……………そうです。」

おお!! 答えた。

「何でロストログアがここに?」

「これ以上はお答えできません…」

ふうん、まあいいか。

「でアイはこれからどうするつもりだ。」

「まだ決めてません。」

仕方ない。デバイスは欲しかったところだし…

「よし決めた!! アイ。とりあえず家に帰るぞ。続きはそこで話そう。」

「はい、分かりました。」

結構暗くなってるな〜急いで帰ろう!!

家

「ただいま!!」

しゅん

ボタン!!

ダダダダダダ!!

「お帰り〜かりちゃん!!」

未確認生物を前方に確認。

「アイ。」

念話でアイに話しかけた。

「何ですか？マスター」

「バリアジャケットと武器を出せ。そしてプロテクションをしたあとチェーンバインドをしろ。」

何時までもそのデカ乳に埋もれて窒息死寸前まで追い詰められる生活から解放されるぜ!! ヒヤッハア!!

「マスター!?! 何があったのか知りませんが落ち着いてください!」

チッ!! 仕方ない。回避!!

サッ（俺が横に移動する）

スカッ（未確認生物が空振り）

ゴッ!!（未確認生物がドアと正面衝突）

さて、

「父さん！！未確認生物が気絶したよー！！」

父さんに未確認生物の後片付けを頼むとしよう。

「死ねええええ！！雁斗おおおおお！！」

ブオン！！と空気を唸らせながら凄まじいパンチが飛んできた。

チッ！！俺を殺す気か！！仕方ない。必殺

「未確認生物の盾」

未確認生物もとい母親を盾にした。

空気を唸らせながら迫ったパンチが止まった。

「くっ！？明子を盾にするとはそれでも私達の息子か！？」

「ざけんな！！壁を粉碎しそうなパンチを息子に向けるお前はそれでも俺の両親か！！」

「とりあえず、雁斗。明子を放しなさい。」

「分かった。」

俺は母さんを放した

ブオン！！

バキィ！！

放した瞬間、父さんのパンチによって天井と床にキスをする事になった。

「かかったな！！馬鹿息子がぁ！！」

父さんの勝ち誇った声を聞きながら気絶した。

「む、一撃で気絶とは我が息子ながら情けない。ごふっ！！」

ダッ！！

ドスッ！！

気絶したふりをして父さんが油断してるところに全力の腹タックルをかました。

「だがまだ甘いわ！！」

ドスッ！！

「グフッ！！ち、ちくしょう…」

父さんは腹から俺を掴み上げ、右拳を俺の腹めがけて降り下ろした。俺はそれをガード出来ずモロに食らい今度こそ気絶した。

親子での殴り合いは勝者は父親KO勝ちで殴り合いは終了した。

お前ら家族で何で殴り合いをしてるんだ？ b y イケメンなお兄さん

知るか！！ b y 父親に殴られた主人公

母親を未確認生物扱いしたからだ！！ b y 大人げない父親

自室

あのあと、普通にご飯を食べ、風呂に入り、自室に戻ってきた。

まだ痛いよ…あいつは俺を殴るのに全く遠慮がないな…俺達本当に親子？

「マスター。自業自得だと思います。」

ちくしょう！！デバイスまでもが俺の敵なのか！！

「マスター。私をどうするんですか？」

その問題を忘れていた…

「どうするもなにもお前を俺のデバイスにする。」

「……………本当ですか？」

「ああ、それに俺デバイス欲しかったんだよ。」

「もう知らなくいいなんて言えないから、巻き込まれた以上全力で巻

き込まれた騒動を終わらす。」

めんどくさいけど頑張ろう。

「はい!! よろしくお願いします。新たなマスター。」

「こっちこそよろしくな。」

とりあえず、今日はもう寝る!!

おやすみ

第四話「魔導師の戦闘 また戦闘かよ。え？乱入者！？」（前書き）

もうムリポ…

第四話「魔導師の戦闘　また戦闘かよ。え？乱入者！？」

早朝　公園

今日から魔法の練習をすることになった。

「マスター、あの人は誰ですか？」

アイがそんなことを聞いてきた。

「イケメンなお兄さん」

俺達は結界がはれないのでイケメンなお兄さんを呼んではってもらった。

「俺だって暇じゃないんだぞ。翠屋に行ってケーキ買った後釣りをしながらケーキを食うという大事なこと」

充分暇だな。

「マスター。あの人、暇人ですか？」

「まあ、一日を釣りだけで終わらすぐらいだから暇だろう。」

まあ、イケメンなお兄さんは置いといて…

「さて、マスター。気を取りなおして魔法の訓練を始めます。」

デバイスが先生か…何か複雑だわ。

「マスターにはまず射撃魔法を覚えてもらいます。私に出来るのは拘束、防御魔法しか出来ませんから。」

「射撃？」

「射撃魔法は「誘導制御型」「直射型」「物質加速型」があります。マスターには直射型を覚えてもらいます。」

「はあ…」

このデバイスすげえ…

「あとは…魔力斬撃と飛行ですかね。」

魔力斬撃？

「とりあえず、マスター。セカンドフォームになってください。普通にセカンドと言えなれます。」

「セカンド!!」

パアアアア

武器が剣から銃に変わっただけ。
黒い片手銃…いいね。

「さて、マスター。あそこに空き缶を置いてください。」

水飲み場に空き缶を置いてと…

「銃を空き缶に向けて構えてください。」

銃を空き缶に向けると

「銃の前に魔力を集中させてください。」

魔力を集中させる!!

銃の前に小さな弾が形成される。

「それを空き缶に当ててください。」

発射!!

ヒュン!!

ガゴン!!

見事に命中した。それにしても今のは速かったな

「今のが直射型です。」

「これが魔法…」

「これは基本中の基本何ですが、一応技名をつけましょう。」

「技名か…ノーマルショットで良いよ。」

別にかっこいい技名じゃなくてもいい気がする。

「分かりました。では次は飛行をやってみましょう。」

「飛行か…どうやるんだ？」

「簡単に言えば、自分が飛ぶイメージをしてください。」

飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ。

ふわ。

「と、飛べたー！！」

「マスターは飲み込みが早いですね。」

ありがとうございます！！アイ！！

「ではマスター。この辺りを自由に飛んでください。」

「分かった。」

飛ぶイメージを鮮明に頭に浮かべ、再度飛行開始。

風を受けながら飛ぶ。いいね。魔法マジ便利！！

適当に飛んだあと地面に降り立ち、インテリジェントデバイスアイ先生による魔法講座の続きが始まった。

てかこのデバイス何者！？

「では次は魔力斬撃ですね。魔力斬撃とは命中対象を切断する特性を帯びた魔力による攻撃魔法です。」

「はあ…」

「簡単に言えば、剣に魔力を纏わせて切れ味を上げるみたいな感じですよ。」

「まあ、分かった。とりあえず、ファースト!!」

俺がそう言うと思いい片手銃から刀身が淡い水色の剣に変わった。

「よく分かりましたね。」

「いや、銃がセカンドだから剣がファーストかなって思ってたね。」

「そうですか。では剣に魔力を纏わせてください。」

剣に魔力を集中する。

「纏わせたらその魔力を鋭くしてください。」

鋭く鋭く鋭く

「出来たと思うならその木を切ってください。」

「分かった。」

剣を木の横に当てそのまま水平に振った。

ギュパー!!

ドオオン!!

木が真っ二つに切れて上の方が地面に落ちた。

「すげえ…」

「……………」

俺が驚きと喜びを交えた声を出した。
ただアイは何か考えてるように見えた。

「マスターのタイプが分かりました。」

え!?

「タイプって!?!」

「ではそろそろ学校に行く時間ですよ。」

「無視ですか!?! アイさん!!」

このあとどう聞いてもアイにはぐらかせれ結局諦めて学校に行くことにした。

学校に到着!! まあ、バス何だけどさ。

平和なホームルームが終わった。

二時間目ぐらいに将来の夢について考えた。まあ、授業だから考えないといけないから考えた。あれ？これ原作のどっかでこういうの見たことあるんだけどキノセイダヨネ？

昼ごはんの時間は一人で食べたけど…牛乳だけえ？友達はいないのか？

ははははは！！いないけど何か？しかも食べるじゃなくて飲んだだけだろうだって？俺が昼ごはんだと思えば昼ごはんだ！！

下校し帰りはバスじゃなくて徒歩ですけどね。

「マスター！！ロストログアの反応です！！」

急に言うなよ…アイくんよ。

「どこよ？」

「……………これは！？昨日私を見つけてくれた神社です！！」

はあ…とりあえず行きますか！！

神社

これは！？森が酷いように荒らされてる。

「アイ。何か前とは違うんだけど。」

空が黒くなり月が出ている。

「誰かが結界をはっています。」

「けつ」

まるで俺達が来るのを待っていたかのように前方から雄叫びを上げて出てきた。

今回の、黒い人？ 巨人までとはいかないがデカイ。

また、昨日の狼同様目が赤く黒いオーラを纏っている。そして手には赤く燃えるようなハンマーを握っていた。

「アイ。あれはロストロギアなのか？」

「紛れもなくロストログიაです。」

「とりあえず、アイ。セツトアップ！！ファーストフォーム！！」

黒いバリアジャケットを着て、剣を持つ。

.....

こっから三人称？

その黒い人は、まるで雁人の準備が出来るのを待っているかのよう
に静かだった。

そして

「ッ!!」

「■■■■■■■■■■ーーー!!」

昨日ほどの狼程速さはないがそのかわり凄まじい闘気をこちらに向け走ってきた。

「プロテクション!!」

アイはプロテクションを張るが

「■■■■■■■■■■ーーー!!」

ブオン!!

バキィィン!!

黒い人のハンマーでむなしく破壊された。

「なっ!？」

「■■■■■■■■■■ーー!!」

ブオン!!

ズトオン!!

プロテクションを破られたことに驚いていた雁人は、黒い人のハンマーを避けることが出来ずに食らった。

ハンマーを食らい、数メートル飛ばされた。

「ごほっ！！ごほっ！！オエッ！！」

「マスター！！来ます。」

黒い人は上に飛び上がり、ハンマーを振りかぶり、落ちる勢いを利
用してハンマーを降り下ろした。

ドオオオオン！！

地面がぐだけ散った。

雁人は、転がって回避した。

「セカンド！！」

雁人はすぐさま接近戦をやめ、銃に切り替え空を飛んだ。

「ノーマルショット！！」

空から魔力弾を作り放ったが…

「■■■■■■■■ーーーー！！」

ブオン！！

ただの一振りであっけなく打ち落とされた。

「あれは…チート使ってんじゃねえのか？」

「■■■■■■■■ーー！！！！」

ブオン！！

黒い人はハンマーを雁人に向かって

・
・
・

投げた

「oooooooooooo!!」

「マスター！！回避をしてください！！」

飛んでくるハンマーを回避した：

かに思われたがハンマーがブーメランのように戻ってきた。

「マスター！！後ろ！！」

「は？てうおっ！？」

ドオオン！！

「ぐはっ！？」

見事に背中に命中した。

バシッ！！

ハンマーは黒い人の手に戻った。

「アイ…一つ賭けに出ねえか？」

「賭けですか？」

「ああ、——————という方法で行く!!」

「マスター。下手したら負けますよ。」

「アイ。言っただろう。賭けに出ねえかって。」

「分かりました。行きましょう。」

「アイ。チェーンバインドを頼む。」

「はい。チェーンバインド!!」

アイがそう言うのと相手の下から一本の鎖が出て黒い人を拘束した…

「……………」

バキイイイン

があっさり破壊した。

「男は当たって砕けろだ!!ファースト!!」

雇人の武器が銃から剣に変わった。

そのまま黒い人に突撃した。

ただそれを許すほど黒い人は甘くない。雁人を落とすためハンマーを振った。

ドスン！！

ガシッ！！

ハンマーは雁人に命中したが吹き飛ばされずに黒い人の手を掴んだ。

「行くぜ！！魔力剣」

雁人の剣が魔力を纏い、魔力が剣の形に形成された。

ザシュ！！

その魔力剣が黒い人の首を貫いた。

「■■■■■■——！！！！」

ドスン！！

「ぐはっ！？」

黒い人は首に剣を刺されてもまだ動き、雁人に再度ハンマーを当て地面に叩きつけた。

「ファイアレーザー!!」

その時、ある少女声が響いた。

赤い砲撃は雁人と黒い人に飛んでいき、爆発した。

「漆黒の狂人撃破完了。」

その少女はそう呟いた。

第五話「乱入者そしてダイナミック人投げ　ていうか黒い人に負けたようなもの

まだ頑張れる。

第五話「乱入者そしてダイナミック人投げ　ていうか黒い人に負けたようなも

雁人視点

ごほっ!! 何だ!?! いきなり誰かが何か撃ってきたぞ。

「マスター!! 大丈夫ですか!?!」

アイ…

「俺は無事だ。どこで何があった?」

「何者かが私達に砲撃魔法を撃ってきました。」

砲撃魔法って原作の主人公の高町なのはが得意とした魔法だよな。

「漆黒の狂人と一緒に消えたと思ったのですがまだ生きていたんですか…」

と上から声が聞こえた。

声の主は、茶色の髪をポニーテールにして目の色は青。そして姿は可愛い魔法少女みたいな服装…ただ色が赤と黒を中心としたバリアジャケットだ。まるで悪魔をモチーフにしたようだ。

「お前が砲撃を撃った犯人か?」

「はい、その通りです。」

あっさり認めたぞ。

「お前…その角度にいたらパンツが見えるぞ。」

「マスター!?!」

「…ッ!!!／／／」

赤くなれても困るんだけど…

「ファイアシュート!!!／／／」

少女が顔を赤く染めながら魔力弾を生成し俺に放った。
合計16発の魔力弾が俺に迫ってくるーて、え!?!

「セカンド!! マルチショット!!!」

俺はすかさずセカンドフォームになり、魔力弾生成し4発放ったが
相手の魔力弾を全て落とすには数が足りない。

数にして12発の魔力弾が俺に迫るー

ブオン!!

が突如飛来したハンマーに全て落とされた。

は?嘘だろ…

「そんな…馬鹿な事が…」

「まさか…」

俺達は驚愕した。

パシッ！！

煙の中からハンマーを取り、黒い人が悠然と出てきた。まるで砲撃なんて効いてないぞと言わんばかりに雄叫びを上げた。

「■■■■■■ーーー！！！」

黒い人は生きていた。

「おいおい、首に致命傷もらってそのうえ砲撃をもらってもまだ倒れないのかよ!?!」

「どんだけチート何だよ!?!」

「フアィアレーザー!!」

油断した…俺が黒い人を見ると少女は俺に向かって砲撃を撃ってきた。

ドオオオオン!!

砲撃をモロに食らった。熱くて痛い。バリアジャケットを貫通しかけたんだけど。

「マスター!?!しっかりしてください!?!」

アイ心配しなくてもちゃんと聞こえてるよ。けど無理だわ。黒い人

のハンマーを4発と砲撃を食らったから流石にもう限界だわ。

「これで漆黒の狂人に集中出来ますね。」

少女が呟いたその瞬間、俺は目を疑った。

「■■■■■■■■■■ー！！！」

黒い人がこちらに向かってきてるんですけど。

は？

黒い人は俺を守るように背を向け立っていた…

「ファイアシュート！！！」

少女が魔力弾を生成し黒い人に放った。

ブオン！！

「■■■■■■■■■■ー！！！」

黒い人はそれをハンマーを投擲し難なく打ち落とす。

「ファイアパニッシュ！！！」

少女が魔力を自分の前方に溜めてそれを砲撃として放つ。
ただ途中で砲撃が広範囲に拡散した。

砲撃が雨のようになり、俺達に向かってくる。

「……………」

対する黒い人はハンマーを地面に置き、腕を顔の前で交差させ、防御体制をとった。

ドン！！ドン！！ドン！！ドン！！ドン！！ドン！！

砲撃の雨が降り注いだ。

砲撃の雨で煙が立ち、当たりの視界を奪った。

「……ッ！！これでも倒れないんですか？」

やがて煙がはれ、地面は所々へこんだりえぐれたりしていた。

ただ黒い人は何事もないように立っていた。

「その…：勇気ある少年よ」

……………誰の声ですか？

「まさか…：ロストロギアが喋った！？」

少女が驚いてるな。

「マスター！！ロストロギアが喋るなんてあり得ないことなんですよ！？」

アイ…：分かったありがとう。

「で何です？ 黒い人」

「私は君に負けた。」

いや、どう見てもこっちが負けじゃん。

「いや、君は明らかに戦いをしはじめたばかりだと戦っていて分かった。そんな君に致命傷を貰ったんだ。君が勝ったも同然だ。」

いや、致命傷を貰ったんだってあんたピンピンしてるじゃん。

「私は一人の戦士として君に負けた。だから戦士として勝ったもののしたにつく。」

「え！？ 味方になってくれるってこと？」

「ああ、と言いたところだが君から貰った致命傷のせいでもうすぐ消える…だから君をここから逃がすことだけやらしてもらおう。」

ガシッ！！

へ？ 黒い人。何で頭を掴むんですか？

ブン！！

て、うおおおおお！？ 投げ飛ばしやがったあの野郎！！

覚えていろよ！！ 黒い奴！！

雁人視点終了
黒い人視点

さて、少年は空を飛べるから大丈夫だろう。

問題は…

「あなたが喋れたことには驚きましたが邪魔者を逃がしてくれたことと感謝します。これであなたを消すことだけに集中出来ます!!」

この少女か…

「君に私を消すことなんて出来ない。」

「やってみないと分かりません。」

この少女が何故私のような亡霊のようなロストロギアを求めるかは分からないな。

「ッ!! あなた…体が…」

どうやら限界らしいな。理性をなくし、どす黒い狂気に身を任せた私が…まさかあのような少年に負けるとはな。

「私の金貨は少年を投げるときに少年に持たせた。だから今私を消そうがロストロギアは手に入らないがそれでも私を消すか？」

「いえ、私の目的は、ロストロギアです。ロストロギアを持っていないあなたを消すことに意味はありません。ですからここは引かしていただきます。」

少女はそう言って空へ消えていった。

さて、私の役目はここまでか…少年からはあの獣の気配がした。少女からは彼女の気配。

私を含めれば三人…あと二人だけか。

少年。あの二人は私のように優しくはないぞ。

さて、亡霊は早く消えるでしょう。

ではさらばだ。勇気ある少年よ。そして少女よ。

私は笑いながら消えた。

第六話「着地失敗!!そして腕輪? 黒い人、いきなり投げるな!!そして主

今回は短いです。あ!!いつもか…

第六話「着地失敗!!そして腕輪? 黒い人、いきなり投げるな!!そして主

黒い人に投げられたあと、俺は河原に叩きつけられた。

「背中が痛い…」

「マスター。大丈夫ですか？」

「受け身をとるのを忘れてた。」

くそう…背中が本当に痛い!!

て、あれ? ポッケに何か入ってる…これは!?

「ロストロギア…」

? 漆黒の狂人という文字がはいった金貨が俺のポッケに入っていた。

「マスター?」

おっとちよつとボーとしてたな。

カチャ!!

金貨をポッケに入れようとしたら何かの音がした。

「今の何の音でしょうか？」

音の発生源をたどると…

俺の右腕に黒い腕輪がついていた。

「何これ？」

「腕輪ですかね。」

言わなくても分かるよアイ。

「少年よ。聞こえるか。」

すると金貨から聞き覚えのある声が聞こえた。

「黒い人！！よくも投げ飛ばしやがったな！！」

さっき俺を投げた…黒い人の声だった。

「少年よ。私からの贈り物を受け取ったか。」

「いや、元々腕についていたから受け取った訳じゃないぞ！！」

なんだこのギャグキャラは…

「さて、私の意識が消える前に金貨と腕輪の使い方を教えていこうと思う。」

ん？使い方？

「まず、私か狼の金貨を出してくれ。」

お前のにしよう。

「腕輪に金貨をはめるところがある。そこにはめてくれ。」

ん？ああ、ここか：

カチ！！

金貨をはめた瞬間、俺は黒い霧に包まれた。

霧がはれると：

手に黒い人と同じハンマーがあつた：

え！？ええええええええええ！？

「その腕輪ははめた金貨によって装備を変えてくれて、ある特殊能力がつく。」

特殊能力？

「一つは相手の防御魔法を破壊できる。」

すげえ便利だな。

「ただし代償としてこちらは防御魔法を使用することが出来ない。」

「使えねえ。」

「……………二つ目は、ハンマーを伸縮自在に伸ばせて大きさを変

えられる。そのかわり…」

またかよ!?

「飛行魔法が使えない。」

「寝言なら寝て言えよ…」

飛行が使えないのはキツイ。

「だから使うのはトドメか短期決戦ぐらいだろう。」

ん?

「お前は砲撃を喰らっても平然と立っていたよな。」

「鎧は本物だ。」

分かりました。とりあえず攻撃力が必要になったら使お。

「すみません。警察ですか？」

ん?何かあったのか?

「ここに鈍器を持った少年がいます。直ぐに来てください。」

通報されちゃった！？

ヤバイ、この場から一時撤退！！

ハンマー重たくてしかも邪魔にしなければねえ！？

第七話「邂逅 新しい力を手に入れたけど使いどころが難しい」(前書き)

特になし

第七話「邂逅　新しい力を手に入れたけど使いどころが難しい」

警察に通報されてあの場から逃げた。

あの後ハンマーをしまった。あれ凄く重いよ。ハンマーを片付けたら走る速度が結構速くなった……。どんだけ重いんだよあのハンマー

「マスター。また結界がはられました。」

何だと？　そう言えば、景色が変わってるな。

「マスター！！　前方に魔力反応です！！」

アイの声を聞いて、斜め上を向いたら……いたよ。あのときの少女が。

「見つけました。あのとき漆黒の狂人に投げられた少年。」

嫌なことを思い出させてくれるな。

「あなたを探してのには理由があります。」

「理由？　俺に話し合いにでも来たの？」

「はい、その通りです。」

あ、当たった！？

「単刀直入に言います。貴方の所持しているロストログアを渡してください。渡さないなら力づくで奪います。」

話し合いじゃなかった!?

「ちょっと待って!?! お願いだから待ってよおお!?!」

少女が金貨を出した。

「? 漆黒の魔女。召喚。」

少女がそういった瞬間、少女の前に黒いオーラが集まり、そこから黒いとんがった帽子を被った女の人が出てきた。

「んゝ久々に出したと思ったらあんな少年が相手なの?」

「はい。」

喋った!?! 黒い人と同じか。

あの少女: ロストログアから魔女を出した: ということは同じロストログアを持ってる俺も出来る可能性がある!!

俺は直ぐに狼の金貨を出した。

「? 漆黒の銀狼召喚!?!」

すると金貨からあのとき俺が倒した狼が出てきた。

「へえゝただの少年かと思ったらあの狼を倒せる程実力はあるよね。」

「まさかまだロストロギアを持っていたとは…」

「小僧…この俺を呼び出して何のようだ。」

狼さん、案外友好てきだった。俺はてっきり「人間風情があ…!あ
の時はよくも俺を殺してくれたな…!その頭を食いちぎってやるよ
…!」的な感じだと思ってたのに

「小僧…感謝する。」

へ？

「まさか…あのくそ女と戦える機会をくれるとは…」

「それはこっちの台詞よ。駄犬」

「五月蠅いぞ…!性悪女が…!」

まさか…お前ら、仲悪いの？

「ええい、小僧…!俺は俺で戦わしてもら…!」

「え…!」

「まず、あの駄犬を消すわ…」

「ちょっと…!」

ロストロギア達は光の速さで消えた…そして俺たちの間に訪れたの

は…重たい沈黙だった。

「……………」

「……………」

この場に居たくない！！早くこの場を去りたい。

「あの、ちょっといいですか？」

重たい沈黙の中少女が話しかけてきた。

「な、何かな？」

「一時休戦にしませんか？私達のロストロギアが帰って来るまで…」

確かにな…元々ロストロギアを奪うために来てるのにそのロストロギアがいなくなったら戦う意味もないか。

「分かった。一時休戦を受け入れるよ。」

「ありがとうございます。」

さて、ロストロギアはどこまで行ったんだろうか？ていうかあいつらあんなに仲悪かったのかよ…

まあ、あいつが帰ってきたら聞いてみるか

一万PV突破記念「反省会から暴走会 反省会なんて形だけ、暴走させるのが作

え？意味が分からない…俺も途中から分からなくなった。

一万PV突破記念「反省会から暴走会 反省会なんて形だけ、暴走させるのが佐

一万PV

ア「突破記念」

雁「反省会!！」

一万PV突破した記念なのに反省会なの？

雁「大丈夫だ作者。反省会なんて形だけだ。」

ア「まあ、反省する点が多いから出来ないのが本音なんですか。」

ぐはっ!？

雁「ところで作者。これって恋愛ってあるの？」

唐突だな。

ア「年頃の男の子には気になるんでしょう。」

雁「き、気になってなんかナイデスコトヨ。」

ア・作「「凶星か。」」

雁「ずずず凶星じゃないし!！」

ア「嘘が下手ですね。マスター。」

雁「アイはどっちの味方なんだよ!!」

ア「私は私の味方です。」

上から目線かよ。

ア「いえ、そうじゃありません。心を持つ生物は誰の味方になるかなど最後に決めるのは自分です。どんな時、どんな状況でも最後に決断するのは自分です。だから私は私の味方です。」

デバイスが心について語るなよ。

雁「これって本当にデバイス？」

まあ、それはさておき。恋愛は多分ありません。

雁「何で!？」

知ってるか？恋愛フラグと死亡フラグはセット。恋愛フラグが立てば立つほど死亡フラグも立つんだぜ。だからフラグメイカーは恋愛フラグがたくさん立てば、死亡フラグもたくさん立つんだ。

雁「何か怖いな。フラグメイカー。」

ア「本当は作者が恋愛を書くほどの文才がないからやらないだけでしょう。」

ぐばっ!？

ア「そもそも戦闘描写自体まともに書けない人が恋愛なんて書けないに決まっているでしょう。」

ぶるあああああ！？

雁「アイさん！？作者のライフはもうゼロを乗り越してマイナスよ！？もうやめて！？」

ア「まあ、今はこの辺で許しましょう。」

あ、ありがとガババババババババ

雁「作者が壊れた！？」

ア「やり過ぎましたね…」

雁「作者！？目をさませ！？」

私の世間は敵だらけ…

雁「意味が分からん！？」

何で水着でプールを泳いでも良いのにパンツは駄目なんだ…

雁「知るか！！」

ア「世間が許しません。」

何で…何で…

雁「ヤバイ!! 本格的に壊れてきた…」

何で…地球は回るの？

雁「知らん!! てか小学生にそんな聞くなよ!!」

ア「一つ言ってあげましょう。」

何…何何何何何何何何何何!!

ア「ご都合主義です。」

雁「いや、それ言っちゃ駄目なんじゃ？」

ご都合主義ご都合主義ご都合主義ご都合主義ご都合主義ご都合主義
ご都合主義

ア「ご都合主義です。」

雁「俺じゃもうツツコミきれねえ…だから終わる。じゃあまた本
編で!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9467z/>

魔法は使いたいけど管理局には入りたくありません。

2012年1月8日00時52分発行